

『言語学大辞典』所収「インドの言語学」に対する覚書

川 村 悠 人

本稿の目的

古代インドの文法家パーニニ（紀元前5世紀から紀元前4世紀頃）が著した文典『八課集』（*Aṣṭādhyāyī*）はまとまった形で今に伝えられるインド最古の文典であり、それには、ヴェーダ文献に特有のヴェーダ語や当時の知識人たちが日常的に使用していた言語について、多くの派生説明が与えられている。パーニニ文典の中に示される言語分析法、言語解釈法の中には現代の比較言語学の見方とはそぐわない点もあるが、それでも、同文典がヴェーダ学の補強や進展にとって有益な資料であることに変わりはない。ヴェーダ語研究の——そしてもちろん叙事詩サンスクリット、古典サンスクリット、仏教混交サンスクリットなどの研究にとっても——必携書であるヤーコブ・ヴァッカーナーゲル（Jacob Wackernagel）とアルバート・デブルンナー（Albert Debrunner）による『古インド語文法』（*Altindische Grammatik*）においてパーニニの文法規則への言及が豊富に見られることは、パーニニ文法の有用性を端的に物語っている。そもそも、パーニニ文法の分析法は印欧語比較言語学の成立と発展に大きく寄与してきた。さらには、本稿でも触れるゼロという概念の設定など、パーニニ文法が示す方法が現代の言語学で採用されている場合もある。このように、パーニニ文典は印欧語比較言語学に、さらには言語学一般にまで広く裨益する可能性をも有するものである。

パーニニ文典及びそこに示される文法体系に対する最も詳細かつ有益な概説は、『言語学大辞典』第六卷（術語編）の中に収められた「インドの言語学」でなされている。そこでは、パーニニ文法学を含むインド土着文法学の歴史も簡潔に示され、音韻学、音声学並びに語源学の伝統についても論じられる。著者は、とりわけイラン語派の研究で知られる言語学者の熊本裕である。この「インドの言語学」は著者の知識、経験、洞察力の深さを思わせる優れた概説であって、これほど微に入り細を穿ったパーニニ文法概説は、日本語で書かれたものとしては他に類例を見ない。パーニニ文法に携わる全ての人が座右にそなえるべきものである。しかし、そのように多くの人に利用されるべき（そして実際に利用されているであろう）ものであるだけに、パーニニ文法について理解の仕方を限定してしまう記述や誤解を与えてしまう記述は修正される必要があると考える。また本概説の出版後に、研究が進んで新たに指摘された事柄もある。

本稿は、「インドの言語学」でなされるいくつかの記述に対して、その補足あるいは修正を提案するものである。単なる誤記と思われるものについては議論せず、本稿の最後に列挙するにとどめる。以下、「インドの言語学」を「本概説」と表現する。

なお、本稿では状況に応じて「接辞」、「接尾辞」、「語尾」という用語を使い分けているが、それらはパーニニ文典では「接辞」(pratyayah) という用語によって包括されるものである(パーニニ文典 3.1.1: pratyayah)。

音素表 (修正)

パーニニ文法は以下のような音素表を前提としている。

- (1) a i u Ṇ
- (2) ṛ ḷ K
- (3) e o ṅ
- (4) ai au C
- (5) ha ya va ra Ṭ
- (6) lĀ¹ Ṇ
- (7) ña ma ña ṇa na M
- (8) jha bha ṅ
- (9) gha ḍha dha Ṣ
- (10) ja ba ga ḍa da Ś
- (11) kha pha cha ṭha tha ca ṭa ta V
- (12) ka pa Y
- (13) śa ṣa sa R
- (14) ha L

この音素表の配列を利用して、(1)の a から(4)の C までの音(すなわち全母音)を指示する aC や(5)の h から(14)の L までの音(すなわち全子音)を指示する haL といった記号が、パーニニ文法では用いられる。

当該の音素表について本概説 p. 84 (左段) は「14 の規則からなる音素目録」と説明するが、「指標音(上の表で大文字で示されている音素)で区分された 14 の音素群からなる」などと説明する方が適切である。音素表を構成する 14 の音素群はそれぞれスートラ(sūtra 「短句」)と呼ばれることがあるとはいえず、14 の音素群それぞれ自体が 14 の「規則」として何かを規定しているわけではないからである。

パーニニ文法の対象 (補足)

パーニニは様々なヴェーダ語形に対して派生説明を与えているが、彼はインド亜大陸東部に普及したヴァーージャサネーイン派の資料(白ヤジュールヴェーダ文献)については利用しなかったとする見解が、パウエル・ティエメ(Paul Thieme)によって提出されて以来³、学界では受け入れられてきた。本概説 p. 84 (左段から右段)でも「パーニニが利用したヴェーダ(『世界言語編(上)』「ヴェーダ語」を参照)のさまざまな学派のテキストのうち、北インドに普及したカータカ(Kāṭhaka)派のヤジュールヴェーダの言語がパーニニにもっとも近く、東部に普及したヴァーージャサネーイン(Vājasaneyin)派のテキストをパーニニが利用していないことも、これに符合する」と述べられており、ティエメの研究成果が受け入れられている。一方、学界の定説となっていた「パーニニは白ヤジュールヴェーダ文献を利用していない」という結論には

再考の余地があることが、近年、尾園絢一により指摘されている。尾園によれば、パーニニが定式化したヴェーダ語用の特殊規則に対応する例が白ヤジュルヴェーダ文献（つまり『シャタパタ梵書』[*Śatapatha-Brah̥mana*]) に少ないのは、単にパーニニがその語形を通常規則により説明しているからである⁴。

無論、この新たな研究成果は本概説の出版後に提出されたものであるから、それに言及していないことを非難する意図はない。

パーニニ文法の性格（補足）

パーニニ文法はサンスクリット語で *vyākaraṇa* と呼ばれる。この語は動詞前接頭辞 *vi* と *ā* を伴う動詞語基 *kr̥* からつくられた名詞である。この *vyākaraṇa* という語によって指し示されるパーニニ文法が目指したものは何なのかということについて、種々の議論がある。本概説 p. 84（右段）はパーニニ文法の目的を「正しいサンスクリット (Skt.) の語を形成することである」としている。より正確に言えば、パーニニ文法は文 (*vākya*) から抽出された語 (*pada*)、語から抽出された語基 (*prakṛti*) と接辞 (*pratyaya*) などを前提として、語基の後への接辞導入や音の代置（置き換え）などの文法操作によって語を、そして語からなる文を組み立てていく規則の集成である。このようなパーニニ文法の性格から、それをチョムスキーに端を発する生成文法に比べる学者もいる。

語や文の分析ではなく語や文の形成にパーニニ文法の目的を見るのが一つの立場であり、上述したように、本概説もその立場を表している。ティエメもまた、パーニニ文法では単語を分析する方法は示されておらず、それが示すのは、前提とされる構成要素がつなぎ合せられていく方法であるとし、分析ではなく形成の方にパーニニ文法の性格を見ている⁵。この考えのもと、ティエメは *vyākaraṇa* という語を「様々な方法で、もしくは特定の仕方、諸々の語形を生み出す手段」(*‘vividhena prakāreṇa (or: viśeṣeṇa) ākṛtayaḥ kriyante yena’*) という意味で解釈している。

He (i.e., Pāṇini) does not demonstrate how wordforms can be analyzed into their constituent functional elements by methodical deductions and inferences . . . rather, he presupposes these elements and shows in which, sometimes highly complicated, ways they are to be combined. This is why his work is called a *vyākaraṇa*, that is: ‘an instrument by which forms are created in various ways’ or ‘specifically’: *vividhena prakāreṇa (or: viśeṣeṇa) ākṛtayaḥ kriyante yena*, as I should paraphrase in Sanskrit. (Thieme 1982–1983: 11)

ジョージ・カルドナ (George Cardona) やハルトムート・シャルフェ (Hartmut Scharfe) もパーニニ文法が言葉の分析を行うという点をはっきりと否定している。

Pāṇini’s *Aṣṭādhyāyī* patently does not serve as a means for analyzing words and utterances. (Cardona 1997: 571)

In fact, we must say, *vyākaraṇa* does not denote the analysis of a language but giving it shape, as P. Thieme has demonstrated; Pāṇini’s grammar never analyses. (Scharfe 2009: 95)

他方、例えば A という要素に B という要素を導入して最終的に C という要素を作り出すとき、パーニ

ニ文法は C が A と B に分析されることを示しているとも見ることもできる。実際パーニニ文法は、印欧語比較言語学にとって、単語の分析の仕方を知る上での貴重な資料となってきたはずである。2020 年に出版されたインド言語哲学を扱う最新の解説集の中で、マリア・ピエラ・カンドッティ (Maria Piera Candotti) は、数式を例えに出してパーニニ文法がもつ分析的な性格を明確にしている。

There has been a lot of discussion on the fact that the term *vy-ā-karaṇa* is supposedly not fit to represent what grammar in Indian tradition actually does, since grammar does not analyze complex forms, reducing them to their minimal constituents; on the contrary, it starts from minimal units and builds up larger ones in a compositional way. Nevertheless, this does not necessarily imply that this operation cannot be interpreted as analytical, just as a formula such as $2 + 1 = 3$ may be considered as a correct analysis of the number three (or, to say things differently, as a test of the soundness of the concept of unit). (Candotti 2020: 15)

$2 + 1 = 3$ という数式における $2 + 1$ の部分は、3 という結果を作り出すものとしても理解できるが、同時に、3 を分析するものとしても理解できるということである。これをパーニニ文法にあてはめれば、それは語形の形成法を示す規則の集成であると同時に、語形の分析法を示す規則の集成でもあるということになる。

以上のように、パーニニ文法には、単語がどのように形成されるかを示す側面と単語がどのように分析されるかを示す側面があると言える。

なお、インドの伝統においてパーニニ文法がどのように見なされているかについては、サンスクリット文献における *vyākaraṇa* という語の用例を検討したカルドナが論じている。彼によれば、*vyākaraṇa* とは正しくない語形から区別されるものとしての正しい語形を派生組織を通じて説明、知らしめる (*vy-ā-kṛ*) 手段である⁶。

パーニニ文典の構造 (修正)

パーニニの文典『八課集』はその名の通り 8 つの課からなるが、このうち、第 3 課から第 5 課について本概説 p. 85 (右段) は「さまざまな接辞の形態、機能、意味を定義する 1,800 以上の規則からなり、『八巻の書』の中心部分といえる」とする。また、本概説 p. 85 (右段) はパーニニ文典の規則を a から g までの七種類に分けた後、『八巻の書』の中心となるのは、d の文法操作の規定およびそのヴァリエーション e, f, g であると述べ、その直後には「主要な最初の 4 つのタイプ」と述べる。さらに、本概説 p. 89 (右段) には『八巻の書』の主要部分は、指定された条件において指定された位置に特定の要素を出現せしめる規定と、すでにこうして導入された要素をより特殊な新しい条件の下で別の要素で置き換える規定とからなる」という記述がある。しかしながら、パーニニ文典が文法規則を通じて単語や文に対する派生説明をなすとき、当該の単語や文の派生に関わる規則のどれか一つでも機能しなければ正しい形には行き着かない。その意味において、いずれの文法規則もその地位は平等である。したがって、文法規則の間に上下関係があるかのような印象を与えてしまう「中心」や「主要」という表現は避けるべきと考える。パーニニ文法学の伝統においても、パーニニ文典のある部分が中心的または主要で、ある部分はそうではないというような発想はないはずである。

パーニニ文法における vibhakti (修正)

パーニニ文法では、様々な言語項目に指標辞 (it, anubandha) と呼ばれる印を付すことで、ある指標辞を持つ言語項目が単語派生の過程の中に入った時に、その言語項目によってどのような結果が導かれるかを示すという方法がとられる。例えば、動詞語基の後に導入される言語項目として接尾辞 Kta があるが、この大文字で示した K がここで言う指標辞であり、この ta 接尾辞が導入されたときには動詞語根の母音がゼロ階梯 (低減階梯) で現れることを示している (パーニニ文典 1.1.5: knīti ca)。したがって、例えば動詞語基 kṛ 「なす、つくる」の後に接尾辞 Kta が導入されて派生する語形は kṛ-ta 「なされた／つくられた、なすこと／つくること」であり、*kar-ta となることはない (つまり、パーニニ文典 7.3.84: sārva dhātukārdhadhātukayoḥ は適用されない)。また、指標辞は単語派生の過程で例外なくゼロ化されて (パーニニ文典 1.3.9: tasya loṇaḥ), 最終的に派生される語形の中に実現することはない。

このような指標辞はパーニニ文典 1.3.2-1.3.8 で定められているが、そのうちの 1.3.4: na vibhaktau tusmāḥ について、本概説 p. 87 (左段) は「ただし、名詞格語尾における歯音系列の閉鎖音と n, および s, m は (末尾の子音であっても it と) しない」という訳を与えている。ここで本概説は規則中の vibhakti という語を名詞語尾と解しているが、以下の規則が示すように、パーニニ文法において vibhakti という語は名詞語尾だけではなく動詞語尾も指す⁷。

パーニニ文典 1.4.104: vibhaktiś ca ||

「名詞語尾 (sUP) と動詞語尾 (tiÑ) のそれぞれの三者組は vibhakti と呼ばれる」

上に述べたパーニニ文典 1.3.4 における vibhakti という語によっては、名詞語尾だけではなく動詞語尾も指示されている。それゆえ、例えば動詞語尾 tas (1 人称双数語尾) の最終音 s が指標辞と見なされることは回避され、pacataḥ (< pac + ŚaP + tas) 「我々二人は調理している」といった実現形の派生を説明することが可能となる。

内的根拠操作と外的根拠操作 (修正)

パーニニの文法規則は、最終的に正しい形にたどりつけるよう適切な順序で適用されねばならない。さもなければ、意図されたものとは異なる語形が派生されてしまうことになり、世間で実際に使用されている語形を文法学が派生説明できないことになってしまう。そのような文法規則の順序を決めるための文法規則として、解釈規則 (paribhaṣā) というものがパーニニ文法学にはある。そのうち、おそらくこれまで最も多くの議論を呼んできたのは antaraṅga 解釈規則 (antaraṅgaparibhāṣā) という名で知られる解釈規則である。本概説 p. 89 (左段から右段) は、当該の解釈規則を次のように説明している。

さらに、「カッコ入れ」の原則も必要とされる。たとえば, *ayaja indram* 「私はインドラ神を祭った (yaj- 中動・不完了過去・1 人称単数)」という発話を形成するためには, *a-yaja-i indram* > *ayaje indram* > *ayaja indram* という過程を経なければならない。この最初の段階で, *-i+i-* > *ī* (6.1.101, → § 20) という望ましくない結果を生じさせないためには, ((*ayaja-*) *i*) *indram* のようにカッコに入った形を想定し, 文法操作は一番内側のカッコ内に始まって, 順にカッコをはずしつつ外側へ移動すると

考える必要がある。こうして、*aṅga*（接辞を付加される語基）に関して、「*antar-aṅga*（内的語基）は *bahir-aṅga*（外的語基）に優先する」といわれる。

ここで *antaraṅga* と *bahiraṅga* に対して「内的語基」と「外的語基」という訳語が与えられているが、両語における *aṅga* は文法操作の根拠（*nimitta*）を指し、全体としては所有複合語で、それぞれ「内に根拠をもつ [文法操作]」と「外に根拠をもつ [文法操作]」を意味すると解されるのが一般的である⁸。日本語で表現するならば、*antaraṅga* は内的根拠操作、*bahiraṅga* は外的根拠操作である。文法操作の「根拠」とは何か、文法操作の根拠が「内にある」あるいは「外にある」とはどういうことかという問題をめぐって、文法学者らが多くの議論を展開している。いずれにせよ、本概説が言及している以下のような *antaraṅga* 解釈規則は、内的根拠操作と外的根拠操作が同時に適用可能な状況において前者が優先的に適用されることを述べるものである。

antaraṅgaṃ bahiraṅgād baliyaḥ ||⁹

「内的根拠操作は外的根拠操作より強力である」

本概説が挙げる例において適用順序が議論されている規則は以下の二つである。

パーニニ文典 6.1.87: *ād guṇaḥ* ||

「音の接続の領域で、*a/ā* 音に母音が後続するとき、先行音と後続音に *guṇa* (*a, e, o*) が唯一代置される」

パーニニ文典 6.1.101: *akaḥ savarṇe dīrghaḥ* ||

「音の接続の領域で、*aK* (*a, i, u, ṛ, ḷ* 及びその同類音) に同類音である母音が後続するとき、先行音と後続音に長音が唯一代置される」

a-yaja-i indram という段階で優先適用されるべきは、前者の規則が規定する文法操作であり、この文法操作が後者の規則が規定する文法操作よりも先に適用されることを保証するのが、上にあげた *antaraṅga* 解釈規則である。前者の文法操作を根拠づける *-a-i* という音の連続は *a-yaja-i* という 1 語内にあるのに対して、後者の文法操作を根拠づける *-i i-* という音の連続は *a-yaja-i* と *indram* という 2 語にまたがっている。したがって、1 語内に操作適用の根拠をもつ前者の文法操作は「内的根拠操作」であり、操作適用の根拠が一語内には収まらず外にある 2 語目にまたがっている後者の文法操作は「外的根拠操作」である。このとき、上の *antaraṅga* 解釈規則によって、内的根拠操作を規定する前者の規則 6.1.87 が優先的に適用されて、最終的に正しい文が派生される。

パーニニ文法における不変化詞（修正）

パーニニ文法は名詞形や動詞形からなる文の派生を目指すものである。屈折した形で文に現れる名詞形と動詞形は以下の文法規則により *pada* 「完全屈折形」と呼ばれる。

パーニニ文典 1.4.14: *suptiñantaṃ padam* ||

「名詞語尾で終わる項目と動詞語尾で終わる項目は *pada* と呼ばれる」

本概説 p. 90 (左段) は、この pada へ至る過程としてパーニニ文法ではどのようなものがあるかを提示している。そのうち、「i) 動詞人称語尾 (tiN̄) によるもの」と「ii) 名詞格語尾 (sUP) によるもの」という項目と別立てされた形で「iii) avyaya (不変化詞)」が挙げられているが、本概説 p. 91 (左段) で正しく説明されているように、パーニニ文法において不変化詞はまず何らかの名詞語尾が導入されて次にそれがゼロによって代置されているものと見なされる。不変化詞に後続する名詞語尾はゼロ化によって認識できなくなっているが、以下の文法規則を通じて不変化詞が A 1.4.14 により pada 「完全屈折形」と呼ばれることが成立する。

パーニニ文典 1.1.62: *pratyayalope pratyayalakṣaṇam* ||

「接辞がゼロ化されても、接辞を条件とする文法操作が適用される」

つまり、不変化詞 + ゼロにおけるゼロが当該規則により名詞語尾として扱われることが許され (不変化詞 + 名詞語尾)、名詞語尾がゼロ化された不変化詞にも上述したパーニニ文典 1.4.14 の適用が可能になるということである。このように、不変化詞が pada 「完全屈折形」と呼ばれるのも名詞語尾によるから、「iii) avyaya (不変化詞)」という項目は、「ii) 名詞格語尾 (sUP) によるもの」という項目とは別立てせずに、その中に下位区分として含めるのが適切である。

なお、不変化詞の後に何らかの名詞語尾が導入されていることを知らしめながら、それがゼロによって代置されることを規定する文法規則は以下である。

パーニニ文典 2.4.82: *avyayād āpsuḥ* ||

「不変化詞に後続する女性接尾辞 āP と名詞語尾 (sUP) にゼロ (luK) が代置される」¹⁰

パーニニ自身は、第 1 格単数語尾 sU から第 7 格複数語尾 suP まで 21 個ある名詞語尾のうち (パーニニ文典 4.1.2: *svaujasamautchastābhyāmbhisnebhyaṃbhyasnasibhyāmbhyasnasosāmīyossuḥ*)、どれが不変化詞の後に導入されるものとして想定されるのかを明確にしていないが、11 世紀の文法学者カイヤタは、それを、パーニニの文法規則が一番最初に提示する第 1 格単数語尾に特定している。最初のものをとばす理由はないからである¹¹。

パーニニ文法におけるゼロ (補足)

本概説 p. 90 (左段) ではパーニニの文法規則に対する訳の中で、本概説 p. 91 (左段) 及び p. 95 (両段) では単語が派生する過程を説明する中で、パーニニ文法におけるゼロが「ゼロ接辞」という言葉で言及されている。一方、本概説 p. 95 (右段) ではパーニニの文法規則に対する訳の中で「ゼロ要素」、本概説 p. 93 (右段) では単語が派生する過程を説明する中で「ゼロ代置要素」という言葉が用いられている。

現在、言語学においてゼロ形態あるいはゼロ交替形という概念はよく知られている。例えば、sheep 「羊」という単語は単数形でも複数形でも sheep であるが、複数形 sheep 「羊たち」は通常の数形要素 s の代わりにゼロ交替形をもっていると説明される (sheep + φ)。このようなゼロという要素の概念は直接パーニニ文法に負うものと言われる¹²。パーニニ文典に対する逐語的注解書である『カーシカー注解』(*Kāśikāvṛtti*, 7 世紀頃) は、パーニニ文法におけるゼロを説明して「[言語項目の] 意味は理解されるが、

[その言語項目が] 使用されていない場合、ゼロがある」と述べている¹³。上の *sheep* の例にあてはめると、複数形 *sheep* からは羊の複数性という意味は理解されるが、その意味を担う *s* という形態素は用いられておらず認識されないという状況下で、そこにはゼロという交替形が起こっていると考えられることになる。

パーニニ文法では、ゼロは次の規則により規定されている。

パーニニ文典 1.1.60: *adarśanaṁ lopah* ||

「ゼロ（不知覚）は *lopa* と呼ばれる」

そして、このゼロの中には次の規則によって以下の三つが含まれる。これらゼロのうちのどれが起こるかによって、その後に展開する派生過程が変わる。

パーニニ文典 1.1.61: *pratyayasya lukślulupaḥ* ||

「接辞に代置されるゼロ（不知覚）は *luK*, *ślu*, *luP* と呼ばれる」

本規則における *pratyayasya* 「接辞の」という属格形が「接辞の場にある [ゼロ]、接辞の代わりに起こる [ゼロ]、すなわち接辞に代置される [ゼロ]」(*pratyayasya sthāne*) を意味することは、次の文法規則による。

パーニニ文典 1.1.49: *ṣaṣṭhī sthāneyogā* ||

「第 6 格語尾（属格語尾）は『*x* の代わりに *y*』という関係を表示する」

以上のように、パーニニ文法においてゼロは何かに対する代置要素 (*ādeśa*) と見なされており、パーニニ文典 3.1.1: *pratyayaḥ* の支配下規則によって名詞語基や動詞語基の後に導入される接辞 (*pratyaya*) ではない。パーニニ文典 1.1.62: *pratyayalope pratyayalakṣaṇam* などが保証するように、確かに代置要素は原要素 (*sthānin*, *ādeśin*) の性質を受け継ぐ場合があるため¹⁴、接辞（原要素）に代置されるゼロ（代置要素）を、接辞性を受け継いだものとして「ゼロ接辞」と呼ぶことは許容の範囲内ではあるのだが、パーニニ文法において、ゼロはまずもって代置要素として規定されているということを補足しておきたい。

動詞語基の後に導入される接辞（補足）

本概説 p. 92（左段）はパーニニ文法において「動詞語根に付加される接辞は、3.4.113 「*tiN* および *ś* を *it* とするものを *sārvadhātuka*（と称する）」、および、3.4.114 「残余のものを *ārdhadhātuka*（と称する）」によって、この 2 つのグループに分けられる」と説明している。これについて一点補足しておきたいのは、*sārvadhātuka* や *ārdhadhātuka* という名称は、パーニニ文典 3.1.91: *dhātoḥ* の支配下規則によって導入される接尾辞に与えられるものであって、本規則の支配下でない規則によって動詞語基の後に導入される接尾辞の中には *sārvadhātuka* と *ārdhadhātuka* と呼ばれないものがある、ということである。例えばパーニニ文典には次のような規則がある。

パーニニ文典 3.1.5: *guptijkidbhyaḥ san* ||

「動詞語基 *gup*, *tij*, *kit* の後に接尾辞 *saN* が導入される」

本規則は A 3.1.91 の支配下にはない。それゆえ、この規則によって動詞語基 *gup*, *tij*, *kit* の後に導入される接尾辞 *saN* に、*ārdhadhātuka* という名称は適用されない。それゆえ、例えば動詞語基 *gup* の後に *saN* が導入された場合、最終的に *jugupsate* 「嫌悪する、避ける」という語形に行きつくことができる。もし当該の *saN* に *ārdhadhātuka* という名称が与えられてしまうと、次の文法規則によって *saN* は加音 *iT* をとることになる。

パーニニ文典 7.2.35: *ārdhadhātukasyeḍ valādeḥ* ||

「*vaL* (*y* 以外の子音) で始まる *ārdhadhātuka* は *iT* をとる」

結果、**jugupiṣate* という望ましくない語形が派生することになってしまう。このような事態を防ぐべく、上記のパーニニ文典 3.1.5 は 3.1.91 の支配下には置かれていない。3.1.5 に続く 3.1.6: *mānbadhadānsānbhyo dīrghāś ca abhyāsasya* についても同様である¹⁵。

必然適用規則と非必然適用規則 (修正)

パーニニ文法学では、文法規則 *x* と文法規則 *y* がある段階でいずれも適用可能であるとき、どちらの規則を優先的に適用させるかを定める指針となる原理が用意されている。先述した *antarāṅga* 解釈規則の規定内容「内的根拠操作の適用は外的要因操作の適用に対して優先される」もそのような原理の一つである¹⁶。その他の原理の一つとして、必然適用規則／義務的適用規則 (*nitya*) の適用は非必然適用規則／非義務的適用規則 (*anitya*) の適用に対して優先されるというものがある。ある二つの規則 *x* と *y* があり、*x* が *y* の適用前でも適用後でも適用可能である一方、*y* は *x* の適用前でのみ適用可能であり *x* の適用後にはその適用機会を失う場合、*x* が必然適用規則であり、*y* は非必然適用規則である¹⁷。この場合、「必然適用規則」という名が示す通り、*x* は *y* の適用を阻止して優先的に適用される。

本概説 p. 95 (右段) は *gargāḥ* 「ガルガの子孫 (孫以降) たち」という語の派生を説明する際、以下のような過程を想定している。

gārgya + *Jas* > *gargās* > *gargāḥ*

本概説が説明するように、この想定は、次のような派生過程を念頭に置いたものである。すなわち、まず、孫以降の子孫 (*gotra*) を表す接尾辞 *yañ* が導入され (パーニニ文典 4.1.105: *gargādibhyo yañ*)、それに伴って *garga* の第一母音 *a* には *vṛddhi* (この場合 *ā*) が代置され (7.2.117: *taddhiteṣv acām ādeḥ*)、*garga* の第二母音 *a* にはゼロ (*luK*) が代置されて (6.4.148: *yasyeti ca*)、*gārgya* という語形が形成される。次に、この *yañ* のゼロ化 (2.4.64: *yañañoś ca*) とそれに伴う *vṛddhi* 代置の効力の無化 (及びゼロ代置の効力の無化 [本概説は説明していない]) を経て、最終的に *gargāḥ* へ至る。しかしながら、*garga* + *yañ* + *Jas* となった段階で、Katre 1989: 173 が示すように、*garga* という語の第 1 母音の *vṛddhi* 化と第 2 母音のゼロ化が起こる前に *yañ* のゼロ化が起こると考えるならば、より簡潔な仕方では *gargāḥ* へ至ることができる。そして、これがパーニニ文法学において認められるべき派生手順であることは、*yañ* のゼロ化を規定するパーニニ文典 2.4.64 が 7.2.117 と 6.4.148 に対して必然適用規則であることによって証明される。

garga + *yañ* + *Jas* となった段階で、3 つの規則が適用可能である。

1. garga + ϕ + Jas (2.4.64) → yaÑ のゼロ化
2. gārga + yaÑ + Jas (7.2.117) → garga という語の第 1 母音の vṛddhi 化
3. garg ϕ + yaÑ + Jas (6.4.148) → garga という語の第 2 母音のゼロ化

yaÑ のゼロ化を規定するパーニニ文典 2.4.64 は、7.2.117 と 6.4.148 のいずれが適用される前でも適用された後でも適用可能であるため、両者に対して必然適用規則である。一方、7.2.117 と 6.4.148 は、2.4.64 が適用された後では yaÑ という適用根拠を失って適用不可能となるため¹⁸、2.4.64 に対していずれも非必然適用規則である。この場合、2.4.64 は 7.2.117 と 6.4.148 に対して優先適用される。それゆえ、garga + yaÑ + Jas となった段階で、gārgya という語が形成される前に yaÑ のゼロ化が起こると考えるべきである。

誤記 (修正) ¹⁹

- 本概説 p.85 (右段) 「3.1.93 以下」 → 「3.1.91 …」
- 本概説 p. 86 (右段) 「「agni の後に接辞 ḌHaK を導入する」 (4.3.23)」 → 「… (4.2.33)」
- 本概説 p. 86 (右段) 「1.4.44 na vā^ˆiti vibhāṣā」 → 「1.1.44 …」
- 本概説 p. 88 (左段) 「4.1.1 prātipadikāt」 → 「4.1.1 nyāprātipadikāt」
- 本概説 p. 90 (左段) 「3.1.93 dhatoḥ」 → 「3.1.91 …」
- 本概説 p. 90 (右段) 「ŚānaC [3.2.127]」 → 「… [3.2.124–126]」
- 本概説 p. 90 (右段) 「3.1.93 (→ § 30)」 → 「3.1.91 …」
- 本概説 p. 92 (左段) 「「svarita (の母音) …」」 → 「1.3.72 「svarita (の母音) …」」
- 本概説 p. 92 (左段) 「1.3.73 「(使役語幹形成接辞) NiC に …」」 → 「1.3.74 …」
- 本概説 p. 93 (右段) 「-a + i > -e 8.1.87」 → 「… 6.1.87」
- 本概説 p. 94 (左段) 「Ñ-it 13.72」 → 「… 1.3.72」
- 本概説 p. 94 (左段) 「7.4.27 により ṛ > ri」 → 「7.4.28 …」
- 本概説 p. 94 (右段) 「2.2.26 は …」 → 「2.2.15 …」
- 本概説 p. 94 (右段) 「kartṛ を表す ṛC を含む要素と」 → ṛC に加えて aka も述べる必要がある

* 草稿に目を通し種々の有益な助言をくれた矢崎長潤氏 (名古屋大学博士研究員) に謝意を表する。

注

¹ 1 に後続する母音 a は伝統的には鼻母音としての指標辞 (パーニニ文典 1.3.2: upadeśe 'janunāsika it) と解釈されているため (Cardona 1969: 12, note 31 を見よ), 本稿ではそのように提示している。

² Cardona 1997: 83–84 (paragraph 131).

³ ティエメは自身の見解を次のように表明している。Thieme 1935: 74: “We cannot help but arrive at the conclusion that Pāṇini did not draw upon the White YV.” Thieme 1935: 63 によれば, パーニニが精査し利用したヴェーダ語資料は, 現存するものの中では『リグヴェーダ』 (*Rgveda*), 『マイトラーヤニー本集』 (*Maitrāyaṇī-Saṁhitā*), 『カータカ本集』 (*Kāthaka-Saṁhitā*), 『タイッティリーヤ本集』 (*Taittirīya-Saṁhitā*), シャウナカ派『アタルヴァヴェーダ』 (*Atharvaveda*), そしておそらく『サーマヴェーダ』 (*Sāmaveda*) である。

⁴ 尾園 2018: 192–193.

⁵ Thieme 1935: 67 でも, パーニニが目指したものは正しい語形の形成であるとされている (“Pāṇini wanted to teach in his Grammar, how to form the correct (साधु-) wordforms of the language of the educated (शिष्ट-).”).

⁶ Cardona 1997: 564–572 (paragraphs 845–848).

⁷ さらに、パーニニ文法では特定の *taddhita* 接尾辞にも *vibhakti* という名称が適用される。パーニニ文法における *vibhakti* という用語については Sharma 2012 を参照せよ。

⁸ 参考としていくつかの説明を挙げておく。Pradīpa (V.436): *antar aṅgaṃ yasya bahir aṅgaṃ yasyeti bahuvrīhiḥ* | (「[*antaraṅga* と *bahiraṅga* はそれぞれ,] 内に *aṅga* をもつもの, 外に *aṅga* をもつものを意味する所有複合語である」) Paribhāṣenduśekhara 50 (41.9–11): *antar madhye bahiraṅgaśāstrīyanimittasamudāya-madhye ’tarbhūtāny aṅgāni nimittāni yasya tad antaraṅgaṃ | evaṃ tadīyanimittasamudāyād bahirbhūtāṅgakaṃ bahiraṅgaṃ* | (「内に [*antar=madhye*], すなわち外的根拠操作を規定する規則の根拠全体の内部に含まれる諸々の根拠 [*aṅgāni=nimittāni*] を有するものが *antaraṅga* である。同様に, それ [内的根拠操作を規定する規則] の根拠全体の外部に諸々の根拠を有するものが *bahiraṅga* である」) Hṛdayahārīṇī (I.85.1–5): *aṅgaṃ nimittam antar yasya tad antaraṅgaṃ | bahir yasya tad bahiraṅgaṃ | . . . tatrāntaraṅge kārye kartavye bahiraṅgaṃ asiddhaṃ bhavati* | (「内に *aṅga* を, すなわち根拠を有するものが *antaraṅga* である。外に有するものが *bahiraṅga* である。 . . . その場合, 内的根拠操作が実行されるべきとき, 外的根拠 [操作] は成立していないものとなる」)

⁹ Paribhāṣenduśekhara 50 (43.17)から引用した。この解釈規則のもとになっているのは文法家カーティヤヤナ (紀元前3世紀) による言明である (パーニニ文典 1.4.2 に対する *vārttika* 8: *antaraṅgaṃ ca*)。なお, *antaraṅga* 解釈規則には当該の *antaraṅgaṃ bahiraṅgād baliyaḥ* 「内的根拠操作は外的根拠操作より強力である」という形のもので *asiddhaṃ bahiraṅgaṃ antaraṅge* 「内的根拠操作が適用される時, 外的根拠操作は成立していない」という形のもので二種があり, パーニニ文法学の権威であるパタンジャリ (紀元前2世紀) は前者の必要性を否定している。ナーゲーシャもパタンジャリに従う。詳細については Mase 2008 を参照せよ。

¹⁰ 不変化詞に後続する名詞語尾に対して当該規則が代置を規定するゼロは *luK* により指示されるものである。しかし, 名詞語尾がゼロ化された不変化詞に対する 1.4.14 の適用が, 注 18 で言及するパーニニ文典 1.1.63: *na lumatāṅgasya* によって妨げられることはない。ゼロ化される以前の接辞を根拠として何らかの名称 (*sañjñā*) を付与する文法操作は, 1.1.63 による禁止の対象外だからである (Roodbergen 2008: 361)。

¹¹ Pradīpa (I.305–306): . . . *prathamātikrame kāraṇābhāvāt prathamāyā evaikavacanam avyayebhya utpadyate . . .* | (「. . . 最初のを踏み越えて [次のものに] 行くことには理由がないから, 第1格単数接辞こそが諸々の不変化詞の後に生起する. . .」)

¹² ロウビンズ 1992: 166。ゼロ形態素という概念は, 近年, 古代日本語研究でも活用されている。これについては高山 2018 を参照せよ。

¹³ *Kāśikāvṛtti* (II.899): *yatra gamyate cārtho na ca prayujyate tatra lopaḥ* |

¹⁴ 例えば岩崎 2005: 51 (§12.2.1)には, 代置要素が原要素の「名詞語尾としての性質, 名詞語尾性」を受け継ぐことが必要とされる単語派生の一例が示されている。原要素と代置要素の関係について付言しておく, 原要素がもつ意味表示能力は代置要素が必ず引き継ぐものである。この点については小川 1990: 51–53 及び岩崎 2005: 46–47 (§11.2)を見よ。

¹⁵ これらパーニニ文典 3.1.5 と 3.1.6 によって導入される *saN* に *ārdhādhātuka* という名称が適用されるかどうかという問題は, 例えばカイヤタによって論じられている。その議論については尾園 2015: 212–214 を見よ。なお, 尾園 2015: 212 は議論を解説する中で「当該規則に挙げられる *gup* などの後に導入される *sa^N* は接辞とは認められず, *ārdhādhātuka-suffix* ではないとされる」とするが, 当該の *saN* が接辞 (*pratyaya*) であること自体は否定されない。パーニニ文典 3.1.5–6 は, それ以降の規則によって導入が規定される項目に「接辞」という名称を付与する 3.1.1: *pratyayaḥ* の支配下にあるからである。議論の要点は, 問題の *saN* は接辞には違いないのだが, それに *ārdhādhātuka* という名称が適用されるかどうかということである。

¹⁶ ただし, 注 9 で述べたように, 当該の解釈規則の必要性はパタンジャリやナーゲーシャによって否定されている。

¹⁷ Paribhāṣenduśekhara (38.17–39.1): *kṛtākṛtaprasaṅgi nityam tadviparītam anityam* |

¹⁸ *yañ* がゼロ化された後でも以下の規則に基づいて 7.2.117 と 6.4.148 は未だ適用可能である, と考えることはできない。

パーニニ文典 1.1.62: *pratyayalope pratyayalakṣaṇam* ||

「接辞がゼロ化されても, 接辞を条件とする文法操作が適用される」

なぜなら、yañ に代置されるゼロは luK であり、luK 代置によりゼロ化された接辞を根拠とする文法操作の適用は続く以下の規則により禁じられるからである。

パーニニ文典 1.1.63: na lumatāṅgasya ||

「lu を有する項目 (luK, Ślu, luP) を通じて接辞がゼロ化されている語基 (aṅga) に対して、その接辞を根拠とする文法操作は適用されない」

『ニヤーサ』は 2.4.64 適用後に適用不可能となる規則として 7.2.117 のみを挙げているが、6.4.148 も同時に適用不可能となるため、本稿では両規則を挙げている。Nyāsa (I.229): gargā iti | gargādibhyo yañ | yañāñoś ceti bahuṣu luk | atra taddhiteṣv acām āder iti vṛddhir na bhavati |

gārgya という語形を派生する際に適用される 7.2.117 と 6.4.148 自体の適用順序の問題には、本稿では立ち入らない。

¹⁹ なお、何らかの事情があるのかもしれないが、本概説の表題として日本語では「インドの言語学」とされている一方、それと併記される英語表題では Linguistics in Ancient India 「古代インドにおける言語学」となっている。

参考文献

一次文献

- パーニニ文典: Cardona 1997 の Appendix III (Aṣṭādhyāyīsūtrapāṭha) 及び Cardona 1999: 372 の修正表を見よ。
Ḥṛdayahārīṇī: The Sarasvatīkaṅṭhābharāṇa of Śrī Bhojadeva with the Commentary of Śrī Nārāyaṇadaṇḍanātha. Ed. K. Sāmbaśiva Śāstrī. Part I. Trivandrum: Government Press, 1935.
Kāśīkāvṛtti: Kāśīkā: A Commentary on Pāṇini's Grammar by Vāmana & Jayāditya. Eds. A. Sharma, K. Deshpande, and D. G. Padhye. 2 vols. Hyderabad: Sanskrit Academy, 1969–1970.
Nyāsa: Kāśīkāvṛtti of Jayāditya-Vāmana (along with Commentaries Vivaraṇapañcikā–Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra). Ed. Ś. Miśra. 6 vols. Varanasi: Ratna Publications, 1985.
Pradīpa: Śrībhagavt-patañjali-viracitam Vyākaraṇa-Mahābhāṣyam (śrī-kaiyaṭakṛta-pradīpena nāgojībhāṭṭa-kṛtena bhāṣyapradīpoddyotena ca vibhūṣitam). Ed. Vedavrata. 5 vols. Gurukul Jhajjar (Rohatak): Hairyānā Sāhitya Saṁsthāna, 1962–1963.
Paribhāṣenduśekhara: The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojībhāṭṭa. Part I: the Sanskrit text and various readings. Ed. Lorenz Franz Keilhorn. Bombay: The Indu Prakash Press, 1868.
vārttika: The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali. Ed. Lorenz Franz Kielhorn. 3 vols. Bombay: Government Central Press, 1880–1885. Third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by Kashinath Vasudev Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962–1972.

二次文献

- 岩崎良行 [2005] 『マハーバーシャ』における prasaṅga—古代インド思想における〈ことばの永遠性〉の理解へ向けて— 『札幌大谷短期大学紀要』 36: 1–73.
小川英世 [1990] 「行為と言語 サンスクリット意味論研究：動詞語根の意味」 『広島大学文学部紀要』 49 (特輯号 3): 1–119.
小川英世 [2014] 「パーニニ文法学〈言葉の領域外不使用の原則〉について—ディグナーガ「アポーハ論」

- の文法学派的解釈』『インド論理学研究』7: 53–78.
- 尾園絢一 [2015] 「Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 の研究 (2)」『東北大学文学研究科研究年報』64: 202–218.
- 尾園絢一 [2018] 『パーニニが言及するヴェーダ語形の研究—重複語幹動詞を中心に—』東北大学出版会.
- 風間喜代三 [1978] 『言語学の誕生—比較言語学小史—』岩波書店.
- 川村悠人 [2017] 『バツティの美文詩研究—サンスクリット宮廷文学とパーニニ文法学』法蔵館.
- 川村悠人 [2018] 「バツトージディークシタの祭事哲学—文法学派ダルマ論のヴェーダ思想による裏づけと権威づけ」『比較論理学研究』15: 75–90.
- 熊本裕 [1996] 「インドの言語学」『言語学大辞典 第6巻 術語編』(所収 [pp. 83–100]) 三省堂.
- 後藤敏文 [1990] 「インド伝統文法学をめぐって」『特定研究「近代諸科学から見たインド思想の批判的分析」報告書』(所収 [pp. 65–85]) 岩手大学人文社会学部.
- 高山道代 [2018] 「言語分析における「ゼロ記号」の意義をめぐって：格標示機能に焦点をあてて」『歴史言語学』7: 17–33.
- 辻直四郎 [1974] 「インド文法学概観—サンスクリット文法附録」『鈴木学術財団研究年報』11: 1–28.
- 間瀬忍 [2006] 「Paribhāṣenduśekhara 50: asiddham bahiraṅgam antarāṅge 研究 (1)」『比較論理学研究』3: 89–99.
- R. H. ロウビンズ (中村完・後藤斉 (訳)) [1992] 『言語学史』研究社出版.
- Abhyankar, Kashinath Vasudev [1967] *Paribhāṣāpāṭha (A Collection of Original Works on Vyākaraṇa Paribhāṣās): Edited Critically with an Introduction and an Index of Paribhāṣās*. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Abhyankar, Kashinath Vasudev and J. M. Shukla [1977] *A Dictionary of Sanskrit Grammar*. Second revised edition. Baroda: Oriental Institute.
- Böhtlingk, Otto [1877] *Pāṇini's Grammatik, herausgegeben, übersetzt, erläutert und mit verschiedenen Indices versehen*. 2 bde. Leipzig: Verlag von H. Haessel.
- Candotti, Maria Piera [2020] “Linguistic Segmentation in Early Vyākaraṇa.” In *The Bloomsbury Research Handbook of Indian Philosophy of Language*, edited by Alessandro Graheli. London: Bloomsbury Academic, 13–38.
- Cardona, George [1969] “Studies in Indian Grammarians. I. The Method of Description Reflected in the śivasūtras” *Transactions of the American Philosophical Society (New Series)* 59-1: 3–48.
- Cardona, George [1997] *Pāṇini: His Work and Its Traditions*. Volume one. Background and introduction. Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second edition, revised and enlarged. 1997.
- Cardona, George [1999] *Recent Research in Pāṇinian Studies*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Katre, Sumitra Mangesh [1989] *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini: Roman Transliteration and English Translation*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Mase, Shinobu [2007] “Nāgeśa on aṅga in asiddham bahiraṅgam antarāṅge.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 55-3: 1052–1055.

- Mase, Shinobu [2008] “Two *paribhāṣās* on *antarāṅga*.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 56-3: 1081–1085.
- Renou, Louis [1957] *Terminologie grammaticale du sanskrit*. 3 vols. Paris: Champion, 1942. Reprint in one volume, 1957.
- Roodbergen, J. A. F. [2008] *Dictionary of Pāṇinian Grammatical Terminology*. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Scharfe, Hartmut [2009] “A New Perspective on Pāṇini.” *Indologica Taurinensia* 35: 3–272.
- Scharma, Ram Karman [2012] “*Vibhakti* in Pāṇini.” In *Studies in Sanskrit Grammars (Proceedings of Vyākaraṇa Section of the 14th World Sanskrit Conference)*, edited by Goerge Cardona, Ashok Aklujkar, and Hideyo Ogawa. New Delhi: D.K. Printworld, 351–357.
- Tanuja P. Ajotikar, Malhar Kulkarni, and Peter M. Scharfe [2016] “Counterexamples (*pratyudāharāṇa*) in Pāṇinian Grammar.” In *Vyākaraṇaparipṛcchā*, edited by George Cardona and Hideyo Ogawa. New Delhi: DK Publishers Distributors, 23–52.
- Thieme, Paul [1935] *Pāṇini and the Veda: Studies in the Early History of Linguistic Science in India*. Allahabad: Globe Press.
- Thieme, Paul [1982–1983] “Meaning and Form of the ‘grammar’ of Pāṇini.” *Studien zur Indologie und Iranistik* 8/9: 3–34.
- Wujastyk, Dominik [1993] *Metarules of Pāṇinian Grammar: The Vyāḍīyaparibhāṣāvṛtti. Critically Edited with Translation and Commentary*. 2 vols. Groningen: Egbert Forsten.